KS 研究社叢書

大谷利彦

啄木の西洋と日本

KENKYUSHA

大谷利彦

啄木の西洋と日本

KENKYUSHA

研究社叢書

著者紹介

大谷利彦（おおたに・としひこ）。1919（大正8）年福岡生まれ。九州大学法文学部卒業。現在武蔵野女子大学文学部教授。訳書に『ジーキル博士とハイド氏』（角川文庫），『世界文学史物語』（角川文庫）などがある。

KENKYUSHA

〈検印省略〉

啄木の西洋と日本

昭和49年12月15日　発　行

定価は裏表紙，帯に表示。

著　者　大　谷　利　彦

発行者　小酒井　貞一郎

印刷所　研究社印刷株式会社

発行所　研究社出版株式会社

〒162　東京都新宿区神楽坂1-2
TEL.　(03) 269・4521 (代)

表紙印刷　大平舎美術印刷株式会社

装　幀　栃　折　久　美　子

© 1974　Toshihiko Ohtani / PRINTED IN JAPAN

1390-350023-1860

万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します。

目次

一　矛盾の亀裂から噴き出るもの　3
1　時代を超える青春のイメージ　4
2　情念の文学者　16
二　父母の暗い青春　23
三　明治の村と寺　43
四　渋民尋常小学校　59
五　盛岡のハイカラ　77
1　明治の文化人を生む背景　78
2　東北の苦悩　91
3　啄木をめぐる群像　101
六　『あこがれ』への道　113
1　盛岡中学校　114
2　明星ロマン主義　127

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

七　『明星』と西洋　147
八　啄木と英米文学　181
1　啄木の西洋摂取　182
2　ワイルドとの出会い　206
九　啄木のナポレオン像　215
十　佐藤庄太郎日記　237
1　庄太郎とその周辺　238
2　『紫草紙』のころ　255
3　伊藤左千夫とのかかわり　267
4　庄太郎の『明星』観と啄木観　296
5　西洋コンプレックス　305
付　石川啄木年譜　321
あとがき　341
索引　巻末

啄木の西洋と日本

一　矛盾の亀裂から噴き出るもの

啄木の書いた詩稿ノート「呼子と口笛」の扉

1　時代を超える青春のイメージ

石川啄木は、明治十八年（一八八五）十月二十七日（戸籍上は十九年二月二十日）、岩手県南岩手郡日戸村の山寺に生まれ、明治四十五年（一九一二）四月十三日、東京市小石川区久堅町の仮寓で窮死した。二十六歳の短い生涯である。十八年生まれに北原白秋、武者小路実篤、若山牧水、木下杢太郎、土岐善麿、大杉栄などがあり、十九年には谷崎潤一郎、吉井勇、萩原朔太郎、木下利玄が生まれている。啄木と同じ岩手では、近代絵画の異才万鉄五郎が同年、『遠野物語』の語り手、佐々木喜善は翌年の生まれである。西洋ではD・H・ロレンス、モーリヤック、ジュール・ロマンが同年に生まれ、ユゴーがその年に世を去っている。ハイネの先駆的紹介者で、鋭利な文芸評論・文明批評に活躍した田岡嶺雲が没したのは啄木の五か月後、年号はすでに大正に改元されていた。

世界的に幾多のナポレオン伝説、バイロン伝説が存在したように、啄木にもさまざまの啄木伝説が語られてきた。渋民の神童、日本一の代用教員、情熱の詩人、望郷の歌人、輝けるヒューマニスト、プロレタリア文学の先駆者、その他どれだけ多くのことが啄木についていわれてきたことだろう。また啄木ほど自己を伝説化した近代文学者も稀である。青木繁のよき友人であり、すぐれた理解者であった蒲原有明がこう書いている。

青木君のことを追想していると、僕には何だか青木君の一生が飛び離れた無類の伝説のように思われてくる。この伝説的という方面から見れば、かのボオドレエルも矢張りそうだった。P・R・B

（注、ラファエル前派）のロセチもそうであった。アメリカのポオもそうであった。そしてまた、かの美少年のラムボオに至っては、最も濃密な伝説を帯びていた。

いずれも魔術者の片破（かたわ）れである。こんな恐ろしい芸術家の大名をならべ挙げると、余り大形（おおぎょう）なことをいうものではないと真面目にくさす人が出て来るに違いないが、僕にはそうばかりは思われない。伝説を残して行った芸術家たちは、一種共通な蠱惑（こわく）的空気の中に同棲している。事業の大小や、製作の量や、完成未完成というようなことを比較考査するのは禁制である。そんなことをしているひまに、芸術の魅力はどしどし遠ざかってしまうからである（『飛雲抄』〔昭和一三年〕原文旧仮名づかい）。

青木繁自画像
（東京芸術大学蔵）

啄木もまた、そのような蠱惑的魅力を今日なお濃厚にたたえた、数少ない天才のひとりといえよう。しかし、私たちは有明の言葉をこの程度で素通りするわけにいかない。もともと、芸術自体「蠱惑的」なものであり、文学もいうならば「魔術」のひとつにちがいない。それは画家や詩人がこの世に生きた年月の長短や、「事業の大小」にかかわらずいえることである。ここでは伝説化された芸術家の蠱惑的魔術の殿堂に直接参入することより、その蠱惑性の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

秘密を探ることからはじめなければならない。

明治の幾多の詩人や文豪が、時の流れとともに、すでに色あせた存在と化した中にあって、啄木はなぜか青春のシンボルのように若やいだイメージを保ち、今なお広範な読者の心をひきつけている。ひとりの歌人としても、啄木の国民的ポピュラリティには、与謝野晶子や斎藤茂吉のはるかに及ばぬひろがりがあり、平素、文学とか短歌に無縁なひとびとも、彼の作品のいくつかを親しく口ずさむことができるであろう。それは、啄木的世界を拒絶する現代の詩人や作家についてもいえることである。中には、少年時代に啄木の作品に触発され、そこから文学へ接近していったひとも少なくない。

啄木がそのように時代を超えて国民的に親愛され、各世代の若い心をとらえてきたのは、なぜだろうか。その不死鳥に似たふしぎな魅力は、彼の文学に宿る青春性、ロマンチシズムに帰着するといういい方は、簡明なようで、実はそうではない。青春には、矜恃・感傷・苦悩・反逆その他さまざまな特質が同居する。ロマンチシズムの性格も、決して単一ではない。明治の青春は、二葉亭四迷の『浮雲』(明治二〇—二三年)、森鷗外の『舞姫』(明治二三年)、夏目漱石の『三四郎』(明治四一年)にそれぞれ典型的に描かれ、ロマンチックな詩歌を代表するものに、島崎藤村の『若菜集』(明治三〇年)、与謝野晶子の『みだれ髪』(明治三四年)がある。また、北村透谷や、国木田独歩の青春があり、北原白秋の新奇がある。

それらの中にあって、啄木の青春性、啄木のロマンチシズムと呼ぶに値する独自のものが、はたして存在するか否か、存在するとすればその中核をなすものは何かという考察が綿密になされない限り、啄木の蠱惑的ポピュラリティは、いつまでも伝説のヴェールをまとい続けることであろう。

わかり易いところから、蠱惑性の問題に入っていくことにしよう。啄木が民衆に今なお青年のイメージで親しまれている第一の理由は、何よりも彼が短命であったという事実にある。私たちは啄木から、四十歳や六十歳の顔を思い浮かべようがない。しかし、この単純な事実だけで、その永遠の魅力が成り立っているわけではない。民衆の心情に彼の短命を惜しむ、何かが働いているはずである。むしろ、民衆の側におけるそのアルファの働きによって、短命の生涯が美しくいろどられ、蠱惑的青春像が作り上げられているといえないだろうか。

二十代の死が人生の挫折であることは、あらためていうまでもないが、悲運を悼む哀惜の念を短命者の評価そのものに、ストレートに、ときには過剰なまでに持ちこむケースがしばしば見られる。啄木の場合もそうである。啄木を夭折詩人、薄命の歌人と呼ぶとき、夭折・薄命といった言葉に、ともすると、本来の字義を超えたパセティックな美意識や、感傷のかげりが微妙にまじりやすいように思われる。しかも、短命な文学者を美化し、伝説化する心情は、かならずしも日本的特性とばかりいいきれないのである。

たとえば、ソビエトの日本文学研究家マールコヴァは、「みんなの詩人石川啄木――その五十年忌によせて」(一九五八)というメッセージの中で、「同時代の人民の幸福と、地上におけるすべての人々の未来の親善を夢みた石川啄木は(略)殺人者の弾丸に倒れたロシヤの詩人レールモントフのごとく、また肺病で死んだイギリスの詩人キーツのごとく、自分の創造の道を完成せずに若くして死んだ。もしかれらが他のもっと幸福な時代に生まれていたならば、その比類なき才能によって人類を喜ばせつつ、もっと長く生きることができたであろうと悲しまずにいられない。しかしかれらの遺産は、地上

のすべての人々に感謝をもってその名をながく記憶させるに十分である」(鳴海完造訳)といっている。マールコヴァは、また、半世紀を経た今でも「偉大なヒューマニストの火の声」が啄木から聞こえると、熱烈な讃辞を呈しているのである。はたしてそうだろうか。日本におけるヒューマニズム文学の不幸な挫折として、啄木の短命を惜しむこの異国の女流学者も、現代に伝説的啄木像を刻み続けていはしないだろうか。

芸術家や思想家が短命であったということは、ごく少数の例外を除き、人間的にも、仕事の上でも、成熟以前の段階で未完成に終わったことにほかならない。普通の人生の半分も生き得なかった啄木もまた、文学者としての大きな可変性、すなわち、豊かな可能性と多分の危険性とを同時に内蔵しながら、未完成にとどまったひとりであった。そこから逆に、啄木が若死をしたのは、天才詩人の名声を保つ上で好運であったという、北原白秋の言葉もひきだされるのである。

明治時代に啄木と同じ二十代で死亡した芸術家や思想家は、多数いる。

木村　曙	明治二十三年病死	十九歳
北村透谷	明治二十七年自殺	二十五歳
藤野古白	明治二十八年自殺	二十三歳
樋口一葉	明治二十九年病死	二十五歳
瀧廉太郎	明治三十六年病死	二十五歳
松岡荒村	明治三十七年病死	二十六歳

魚住折蘆　明治四十二年病死　二十六歳
青木　繁　明治四十四年病死　二十八歳

年齢を少しのばすと、中西梅花は三十二歳で狂死し、高山樗牛・荻原守衛・大塚甲山は、いずれも三十一歳で病死した。このほか、啄木の盛岡時代の先輩友人で、未来を嘱望されながら夭折した者は十指にあまり、そのほとんどが、啄木と同様に結核で倒れている。これら有名・無名の夭折者の中には、稟質の点で啄木とならび、仕事の新しさ、完成度において、彼を凌駕する人物は一、二にとどまらないであろう。それにもかかわらず、啄木がこれらの誰よりもひときわポピュラーな存在であるのはなぜなのか。

啄木のポピュラリティについて、正宗白鳥のように、「啄木は貧窮に悩んだ。僅か二十七歳やそこらで病死した。人として恵まれるところの少ない一生であった。（略）しかしこの名誉ある円本（注、改造社版『現代日本文学全集』）に、傲然として一冊を占領して、書簡から雑文の端くれまでも網羅しつくされたことを円本に一ページも加わることのできない幾十幾百の明治大正の作家が見たら『啄木は何という幸運児であるか』と思うであろう」（「文学者と『不遇』」昭和三年）というだけでは、問題の要点がずり落ちてしまう。

白鳥がこの文章を『読売新聞』に書いたのは、昭和三年（一九二八）八月のことであるが、すでに大正八年（一九一九）四月から翌年四月にかけて、新潮社版『啄木全集』三巻が刊行されている。しかも、この全集は、出版元の当初の危惧をくつがえし、岩城之徳の調べでは、第一巻の「小説」は大正十四

年十一月現在二十一版、第二巻「詩歌」は大正十五年二月現在三十四版、第三巻「書簡・感想」は大正十四年六月現在十九版に達していたという。以来、啄木の個人全集だけでも、これまでに六種類のものが刊行され、このほか、歌集・詩集・伝記・研究書類はおびただしい数にのぼる。

啄木をそういう「幸運児」たらしめているのは何かという問いかけが、なによりも必要なのである。白鳥は前文の省略部で、啄木は人間の生存苦を直截に歌った歌人として近代無比かもしれないが、それは幾首かの短歌についていわれるべきことで、その他の創作や評論にどれだけの価値があるだろうか、と述べている。この評言は、啄木評価の本質におよぶ重要な内容をふくんでいるのだが、これだけでは、啄木の文学は短歌以外とるべきものがないとする見解に従う、従わないにかかわらず、啄木が蠱惑的魅力を抜群に持ち続けている理由は一体何なのかという当面の問題をそのままにしてしまう。白鳥には、この小文で出版社の姿勢を諷刺する意図があったようであるが、それは問題が別である。

私は啄木のふしぎな魅力も、真価も、彼が内包するさまざまな矛盾が生む悲哀や、焦燥や、怒りや、絶望や、憧憬のあざやかな噴出にあると思う。内面の混沌、撞着の間隙から噴きあがる詩的エネルギーを民衆の平俗な言葉に凝縮させ、文学として形象化する上で、啄木はまさに天才であった。矛盾は、詩人や作家の創作衝動の根源をなすものである。文学は人間の不条理を突きぬけようとするパッションの所産といえる。しかし、啄木ほど矛盾にみち、いくつもの顔をそなえた文学者はまれである。軽薄と真摯、覇気と弱行、善意と身勝手、貴族性と民衆性、選民意識と卑小感、西欧的近代意識と封建的感情、彼の内外に、間断ない矛盾の渦巻が湧き立っていた。

富田小一郎

啄木というと、非力な白面の詩人のイメージを想起しやすいが、富田小一郎教諭に引率された中学三年の修学旅行先で、「宿に着けば四尺五寸の矮身にして飯を食ふ事、時に十一碗に及ぶ。先生遂に笑ふ」(「百回通信」明治四二年)ことがあったこの少年の潜在的エネルギーは、尋常でない。この種のエネルギーが、彼の言動に幾多の矛盾をもたらしただけでなく、身心をさいなむ日常的情念を一気に純粋抒情に結ぶ精神のすさまじい集中力と、卓越した表現力の源泉となっていたのではないか。

函館の宮崎郁雨(大四郎)に家族を託し、単身上京した二か月後のことである。啄木は経済的にも心理的にも最悪な絶望状態のさなかに、六月二十三日の夜から突如として短歌を作りはじめ、興のおもむくまま、徹夜で百二十余首を得た。続いて二十五日にも、『一握の砂』の冒頭を飾る「東海の小島の磯の白砂に／われ泣きぬれて／蟹とたはむる」以下の著名な作品を含め、百四十一首を爆発的に作っているのである。

この途方もないエネルギーが、啄木の文学の根底に働いているのである。しかし、そのエネルギーは、もっぱら文学行為におけるエゴの燃焼に向けられ、実生活にとっては破壊的要素でしかありえなかった。啄木一家の悲劇は、そこに起因している。彼は生活者として怠惰、ごうまんであり、家族愛に欠けていたばかりでなく、自分のからだを大切にすることさえできなかった。一家の生活をささえ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com